



Title	アカデミックな場におけるコミュニケーション : 大学院入学式における総長式辞の「学び」の概念
Author(s)	松本, 敬子
Citation	大阪大学言語文化学. 2004, 13, p. 161-173
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77934
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アカデミックな場におけるコミュニケーション
—大学院入学式における総長式辞の「学び」の概念—*

松本 敬子**

キーワード：学び、コミュニケーション、概念メタファー

This paper discusses a concept of 'learning' that exists in a certain community. In focusing on this, I will analyze entrance ceremony speeches made by the University President, from 1999 to 2003, as one learning community. "The essential criterion for 'community' is that some significant dimension of experience be shared" (Saville-Troike, 1982 : 15). This paper is concerned with how speeches in entrance ceremonies are organized and how they express their function in a much broader sense, as well as how 'learning' concepts are conveyed metaphorically in a community.

I build a theoretical framework based on C Model of Tsuda (2001) and the concept of metaphor from Lakoff and Johnson (1980) in Section 2. The Methods used in this paper are described in Section 3. This paper began collecting the University President's speeches in entrance ceremonies. So far, the research includes 5 years of speeches. The ceremonies' speeches were read, re-read, and gradually organized into sets with functional patterning and metaphorical names. I report my analyses of speeches in detail in Sections 4 and 5. Functional patterning occurs in all speeches. In all cases, patterned variations can be related to aspects of the entrance ceremony's structure or value and belief systems within the respective academic cultures. The President, who belongs to the academic community, employs metaphors to make sense of 'learning'. It is assumed that metaphors are reflections of the ways in which people in a community conceptualize 'learning'. The 'learning' as 'traveling' metaphor can be seen as an adjunct of the more general life is a journey metaphor. The journey

* Academic Communication: The Concept Metaphor of 'Learning' in an Entrance Ceremony (MATSUMOTO Keiko)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

was mapped out for them to convey the 'learning' concept of this community. Metaphor, then, is not just a linguistic embellishment, but a primary means by which people make sense of the world around them. Metaphor helps us to construct reality, to reason with it and to evaluate it. After these arguments on 'learning' concept in entrance ceremony, this paper is concluded in Section 6.

1 はじめに：「学び」の概念

近年、日本の教育界では少子化、生涯学習、大学改革等の大きな潮流の中で、一方ではゆとり教育、他方ではそれと背反する習熟度別学習が求められるなど、「学び」の概念が揺らいでいる。果たして、「学び」とはどのような概念であるのか、その概念は社会とどのような関連性をもっているのか、また、その概念はそれぞれの「学び」のコミュニティ（以下、共同体とする）によりどのように形成されているものなのか。本研究はこれらの研究課題に対して取り組む第一歩としての位置付けを持つものである。

本研究では、「学び」の概念メッセージを明確に、その共同体の「新入り」に対して送るコミュニケーション機能と、その共同体への受け入れ儀式的機能を持ち合わせている入学式を分析対象として取り上げる。その中でも特に、話し手から聞き手へ明確なメッセージ性を持った共同体の長（以下「総長」¹⁾とする）の呈示する式辞の分析を通して、その共同体における「学び」の概念を考察する。

入学式は、「学び」の共同体の1つである学校生活の出発点であり、そこでの学生生活の大きな節目となる行事である。幼稚園、保育園の入園式にはじまり、小学校、中学校、高等学校、大学、大学院等の入学式ではそれぞれの園長、校長、学長の式辞が新入の園児、児童・生徒、学生に対してなされる。入学式の意義は、新入生の期待感に答え、不安感を拭い、新しい生活への期待と希望をもたせることにある。同時に、新たな「学び」の共同体の成員として新参者が受け入れられ、歓迎される儀礼的な一段階である。そこでは、新参者が徐々に、より共同体の成員らしいふるまいをするよう、成員になるための明確なメッセージの受け渡しがなされる場でもある。よって、入学式の式辞には、話し手である総長から聞き手である新入生に向けて、その共同体の成員としてふさわしい「学び」の概念が色濃く反映されているのである。

¹⁾ 本稿では、大学院の入学式を分析しているため総長とする。

2 分析の視点：津田（2001）のモデルと概念メタファー

本節では、総長式辞をアカデミック・コミュニケーションの下位分類として位置付け、この分析の視点として援用する津田（2001）のモデルと学びの概念分析に用いる概念メタファーについて言及する。

2.1 津田（2001）のモデル

津田（2001）²⁾では、コミュニケーション研究の目標を「人間理解に対する深い洞察へと導かれる点が重要」（73）という視座に立ちながら、社会的相互作用としてのコミュニケーションを考察・分析するうえで、以下の3つのモデルを呈示している。

- [A] 一般的な原理・条件に基づいた相互作用としてのコミュニケーション
- [B] リアルタイムにおける意味伝達のプロセスとしてのコミュニケーション
- [C] 文脈・対人関係における自己と他者の呈示としてのコミュニケーション

Aモデルは、「コミュニケーションはことばによってはじめてその効果を発揮する」（津田、2001：23）という視点から「コミュニケーションに関わっている参加者の性別、社会的役割、個人的属性といった側面はほとんど考察あるいは分析の対象とはしない」（同：23）モデルである。Bモデルでは、「話し手や聞き手は重要な文脈の手がかりとしての役を果たしており、相互解釈的活動として、機能を発するものとして位置付けされる」（同：23）モデルである。Cモデルは、「自己と他者が関わりあう場として、参加者の個人的、社会的属性などもコンテクストを構成している要素とみなされる」（同：23）モデルである。本研究では、以上の3つのモデルのうち、Cモデルに依拠した分析を行う。Cモデルのゴールは、発話行為³⁾の分析に最終ゴールを設定していない。むしろ、コミュニケーションの参加者は社会文化的な規範を身につけた存在として解釈されている。

2.2 概念メタファー

Lakoff and Johnson（1980）では、“We claim that most of our normal conceptual system is metaphorically structured; that is, most concepts are partially understood

²⁾ 津田（2001）では日米の姉妹大学とよばれる私立のカソリック女子大学における卒業式の学長式辞の比較分析を行っている。

³⁾ Speech Acts に関して、先駆的な Austin（1962）では、叙述的発話と遂行的発話の区別、言語行為の種類分け（発話行為、発話内行為、発話媒介行為）などが論じられている。弟子の Searle（1969, 1979）では、言語行為の種類、発話内行為の構造、発話内行為の種類、言語行為としての指示などが論じられている。

in terms of other concepts. (56)”と述べ、人間の概念体系は、メタファーにより構造を与えられていると主張する。概念メタファー⁴⁾は、個々のメタファー表現の基盤となるメタファーである。この概念メタファーは、起点領域 (source domain)、目標領域 (target domain)、および両領域を結びつける写像 (mapping) により成立し、抽象的概念領域を身近な日常的経験により形成された具体的概念領域に基づいて理解する認知の仕組みである⁵⁾。概念メタファーによる理解は身体感覚の経験に基づいているため、体系的であり、一貫性がある。よって、概念メタファーによる物事の理解が、日常の言語に反映されやすい。本研究では、概念メタファーの視点を式辞に反映されている「学び」の概念の分析に用いる。

3 調査対象と調査方法

調査対象として、5年間分にわたって計5件の大学院入学式総長式辞が収集できたA大学大学院⁶⁾の入学式における総長⁷⁾の式辞を用いる。表1は、調査対象をまとめたものである。これら大学院入学式における総長式辞という特定の共同体に向けた談話の資料を用いる。なお、分析で用いた5年分の資料中の総長は全て同一人物である。各年の式辞にS1からS5までの番号を付与し、分析に用いた。

表1 調査対象：総長式辞

番号	大学院入学式実施年月日
S 1	平成 11 年 4 月 9 日
S 2	平成 12 年 4 月 11 日
S 3	平成 13 年 4 月 11 日
S 4	平成 14 年 4 月 8 日
S 5	平成 15 年 4 月 7 日

調査方法としては、津田 (2001) で用いられているCモデルに基づいた式辞の内的構造分析を用いる⁸⁾。さらに、共同体内における話し手から聞き手へと伝えられる「学び」についてLakoff and Johnson (1980) の概念メタファーに基づいた分析を行う。これらの観察・分析を通して、大学院という特定の共同体におけるスピーチ機能およびその中に内在する「学び」の概念を明らかにしていく。

⁴⁾ Lakoff and Johnson (1980) のほか、Lakoff (1987)、Lakoff and Turner (1989) も参照。

⁵⁾ 例として、給料が上がる、体温が下がるというメタファーは「数量の多さ/少なさは上/下である」という身体経験に根ざしている。

⁶⁾ 大学名は仮名である。

⁷⁾ A大学では、学長を総長と呼ぶ。以下、式辞の主体は総長である。

⁸⁾ 「学長のスピーチは来賓、父兄、四年生に向けてのスピーチでもって始まり、卒業生に向けての祈りの形式で締めくくられている」(津田 2001: 55)。開始部に感謝の意を表し、祝辞の呈示をおこない、中間部は、山本有三の一節が取り上げられる「論し」と、一粒の麦の話しから創立者の精神を述べ「励ます」の部分から成立している。終結部では、卒業生への願いを祈りで、スピーチは終わっている。

4 式辞におけるコミュニケーション

S 1からS 5までの総長の式辞は、新入生、保護者、来賓に向けての「話しかける」から始まり、新入生への期待のことばで締めくくられる「話しかける」で終結する。各年大学院入学式における総長式辞の内的構造は以下のとおりである。

- S 1：話しかける〔新入生数、お祝いのことば〕→論ず〔学びについて、新入生への期待〕→大学の状況について報告する〔大学院を取り巻く社会環境、本大学院の取り組み：過去、本大学院の取り組み：現在、本大学院の取り組み：未来、学問の流れ〕→期待する〔総長の研究経験、新入生への期待〕→話しかけ〔お祝いのことば〕
- S 2：話しかける〔新入生数、お祝いのことば〕→大学の状況について報告する〔大学院を取り巻く社会環境、大学院の目的・答申、本大学院の取り組み：過去、本大学院の取り組み：現在〕→論ず〔学問の流れ、学問・研究とは〕→期待する〔総長の研究経験、研究者としての心得、高度職業人としての心得〕→話しかけ〔お祝いのことば〕
- S 3：話しかける〔新入生数、お祝いのことば〕→期待する〔新入生への期待〕→大学の状況について報告する〔大学院の目的・学校教育法、答申、本大学院の取り組み：過去〕→論ず〔人物引用、研究者としての心得、高度職業人としての心得〕→話しかけ〔お祝いのことば〕
- S 4：話しかける〔新入生数、お祝いのことば〕→大学の状況について報告する〔本大学院の取り組み：現在、〕→論ず〔研究者としての心得、学問・研究とは、大学院を取り巻く社会環境、高度専門職業人としての心得〕→話しかける〔お祝いのことば〕
- S 5：話しかける〔新入生数、お祝いのことば〕→期待する〔新入生への期待〕→論ず〔人物引用、研究者としての心得〕→大学の状況について報告する〔大学院を取り巻く社会環境〕→論ず〔高度専門職業人としての心得〕→話しかける〔お祝いのことば〕

上記の大学院入学式の総長式辞の内的構造内をさらに分析する。まず、(1)~(5)のように、正確な新入生数を述べた後、祝辞をのべるという典型的な構造がみられる。

- (1) …入学式を迎えられた 2264名の皆さん…ご列席の名誉教授の先生はじめ各研究科長とともに皆さんの入学を心からお慶びいたします。 (S 1)

- (2) …修士課程 2025 名、博士後期課程 916 名、合計 2941 名の皆さん…各研究科長とともに心からお喜び申し上げます。(S 2)
- (3) 大学院修士課程入学者 2115 名、博士課程入学者 916 名、合計 3031 名の皆さん…ご列席の各研究科長とともに、心からお喜び致します。(S 3)
- (4) …入学された 2445 名の皆さん…各研究科長とともに皆さんの入学を心からお喜びいたします。(S 4)
- (5) …入学されました博士前期課程 2172 名、博士後期課程 982 名の皆さん…ご列席の副学長、各研究科長とともに心から歓迎致します。(S 5)

「話しかける」は全体構成のなかでは短く述べられる。下線部のように、新入生数を正確に述べた後、点線のように、大学院全体からの祝いの意を表している。そして波線のような祝辞で締めくくられ、祝意を表す機能を果たしている。

S 1の「論ず、大学の状況について報告する、期待する」、S 2の「大学の状況について報告する、論ず、期待する」、S 3の「期待する、大学の状況について報告する、論ず」、S 4の「大学の状況について報告する、論ず」、S 5の「期待する、論ず、大学の状況について報告する、論ず」の機能を担う部分では、新入生への期待、学問研究の心得、社会情勢、総長の学問研究の経験、大学院の取り組みや新入生への心得などを表し、過去から現在、未来の事態の言及がなされている。また、S 1からS 5の式辞には、言語外的要因の変遷も伺える。例えば、平成 8 年 10 月に大学審議会よりだされた「大学院教育研究の質的向上に関する審議のまとめ」や、平成 10 年 10 月 26 日に大学審議会よりだされた「21 世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学」の答申後の S 1、S 2 の式辞では、大学院重点化推進について以下のように言及されている。

- (6) さて、最近は大学改革、大学院改革ということが言われています。A 大学では、いわゆる大学院重点化を行い、教官は大学院に所属するようにし、大学院の充実を積極的に推進しております。…(平成 3 年から 11 年にかけて発足した研究科の紹介)
…A 大学は大学院改革を積極的に推進してきた大学の一つであるということができ
るでしょう。こういった改革の検討は今後とも継続して行い、必要に応じてさらに
新しい学問領域を創出しながら、21 世紀においてその存在が世界から高く評価され
る大学になってゆかねばなりません。(S 1)
- (7) 今日、大学改革が種々の点から進められていますが、その中で大学院がますます
重要視されるようになって来ています。…このようにして着実に大学院の多様化を

行うとともに、大学院に重点を移した大学院重点化大学、すなわち研究大学という性格をさらに明確にし、社会の期待に応える努力をしているのであります。(S2)

審議会の答申という社会情勢が、入学式式辞というフォーマルな談話の中で、大学院改革推進を表明するという言語行動を生んでいる。

S1からS5において、大学院というひとつの「学び」の共同体への特定の新入学生に対する呼称の変遷も見受けられる。S1において「修士課程2年間で就職を目指そうと思っている人」が、S2では「大学院修士課程で社会に出て行く人たち」と就職を目指している人から実際に社会に出て行く人へと変化している。そして、S3では「高度専門職業人になることを目指している人」となり、S4では「高度専門職業人として社会に出て活躍しようとしている皆さん」と単なる社会人としてではなく、高度専門職業人としての自覚を促す呼称へと変化しており、S5では「専門職大学院の学生」と大学院教育自体が高度専門職業人養成に力点を置き始めたことを伺わせる呼称へと変遷している。このことも、平成16年度から専門職大学院制度が発足するという社会情勢が関わっているものと思われる。

S1からS5の式辞の最後は、共同体の新入生に向けて「話しかけ」て、式辞の締めくくりとしている。

- (8) 皆さんのこれからの大学院生活が実り豊かなものとなりますよう期待致しまして私のお祝いのことばといたします。(S1)
- (9) 皆さんの大学院での勉強と研究が実りあるものであることをお祈りし、お祝いのことばといたします。(S2)
- (10) 皆さんの大学院生活が実りあるものであることを期待し、皆さんのA大学大学院へのお祝いのことばといたします。(S3)
- (11) 皆さんの努力と成功を期待いたします。(S4)
- (12) 皆さんの大学院生活が実りあるものであることを期待し、お祝いのことばと致します。(S5)

下線部のように、この共同体の新入生の「学び」の生活が、点線のように、実りあるものとなるよう期待されることにより、波線のように、お祝いのことばとして「話しかけ」られ、入学式式辞というフォーマルな談話が締めくくられている。

5 共同体成員に示される「学び」の概念

前節では、共同体の成員になることを歓迎しつつ、期待し、励まし、共同体の現状も報告するといった言語機能が式辞に含まれていることを考察した。本節では、これらの言語機能に表れる学びの概念を概念メタファーの観点から分析する。

- 1) 先端を持つ物体の概念 (S 1, S 2)
 - 先端を持つ物体であり、この物体は押し広げ、切り開かれ、メスで切られる物体の概念 (S 1, S 2, S 3, S 4)
 - 先端を持つ物体であり、この物体は押し広げ、切り開かれ、メスで切られる柔軟性のある物体の概念 (S 1, S 2)
- 2) 旅の概念 (S 5, S 4)
 - 戦いの概念 (S 4, S 4)

図1 式辞内の「学び」の概念

分析にあたって、S 1からS 5まで順次、共同体に横たわる「学び」の概念を考察した。その分析結果をまとめたものが、図1である。図1に示されるように、「学び」の概念は1)、2)の下位概念に分類され、さらに1)の概念を分析するとさらに2段階下の下位概念へ、2)からは1段階下の下位概念へと分類することができた。また、1)の物体の概念は主にS 1、S 2で顕著に示される概念であり、2)の旅の概念はS 4、S 5でのみ示される概念であった。以下の(13)から(26)は、図1内の1)および2)の概念分類に沿って記述したものである。

- (13) 学問の最先端がどこにあり、… (S 1)
- (14) 学問の進展した部分、先端的な部分を学ぶ… (S 2)
- (15) 世界の最先端がどこにあって、… (S 2)

(13)~(14)から、<学問・研究とは先端を持つ物体である>、という概念メタファーが成立する。そして、その先端は、研究者により日々拡張されている。

- (16) その先端部分の開拓の仲間入りをして、…先端部分を押し広げてゆくことも期待されております。(S 1)
- (17) …学問というのは未知の世界を論理的、体系的に切り開いていくもの… (S 2)
- (18) …若く鋭い感覚で嗅ぎとって、果敢に挑戦してゆかねばなりません… (S 3)
- (19) …新しい角度から鋭いメスを入れるということが出来ねばならないのであります (S 4)

<学問・研究とは先端を持つ物体>に対し、新入生は、先端部分を「押し広げてゆき」「切り開いていく」ことが期待されている。そして時には「嗅ぎとって、果敢に挑戦」し「鋭いメスを入れ」といったことも期待される。つまり<学問・研究とは先端を持つ物体であり、この物体は押し広げ、切り開かれ、メスで切られる物体である>という概念メタファーへと拡張している。

- (20) …学問領域の境界などを気にせずに、…挑戦していただきたい (S 1)
- (21) …どんなものでも学問としてしまいます (S 2)
- (22) 伝統的な学問だけが学問であるといった窮屈なことをいってはいは学問の発展はありえないのであります (S 2)

<押し広げられ、切り開かれ、メスで切られることもある先端を持つ物体>は、「学問領域の境界」といった「窮屈なこと」を気にせず「どんなものでも」成りえる<柔軟性のある物体>であることを示唆している。

- (23) …自分で道を見つけてゆく覚悟… (S 5)
- (24) …脇道に面白い副次的な課題が見つかって… (S 4)

<押し広げられ、切り開かれ、メスで切られることもある、先端を持ち、柔軟性もある物体>に取り組むことは、「自分で道を見つけながら」「脇道」も面白がるような<旅>である。

- (25) …アイデアを戦わせることが必要であります (S 4)
- (26) …他流試合をする勇気を持つことであります (S 4)

そしてその<旅>の途上では、「他流試合」をし「アイデアを戦わせる」ことも必要であるといった<戦い>の概念メタファーが横たわっている。

以上、新入生に呈示される学問・研究の概念とは、1) <押し広げられ、切り開かれ、メスで切られることもある、先端を持ち、柔軟性もある物体>であり、その取り組みは2) <自ら道を見つけ、脇道も面白がり、時には戦う必要もある旅>の概念である。2) の概念が表れたS 4には、大学改革や大学院重点化といった社会背景がことばに反映されたものと思われる。1) と2) の2つの下位概念は、段階性をもった関係に位置しているのではなく、1つの大きなイメージで繋がっている。総長から新入生へ、身体交流

しやすいレベルでの概念間の伝達というコミュニケーションがなされているのである。

6 おわりに

「学び」の概念をある共同体の「新入り」への受け入れ儀式的機能を持ち合わせている入学式を分析対象とし総長の呈示する式辞の分析を通して、その共同体における「学び」の概念を考察した。新入生に対して、入学を祝い、歓迎し、大学の現状を報告し、論じ、そして期待するという言語機能が、新入生への話しかけで始まり、そして閉じられていた。また、その共同体の成員としての「学び」の概念が社会的な背景とともに<物体>と<旅>の概念メタファーにより色濃く反映され、新入生に対して、明確なイメージを持った概念として伝達されていた。「学び」といった抽象的な概念を<物体>や<旅>といった具体的な概念に写像しながら語ることで、新入生の心に「学び」のイメージがより喚起されやすくなり、ひいては共同体のメッセージをより明確に伝達するという入学式の機能を満たしていた。今後、分析に用いた本共同体の過去の資料や、別の共同体の資料を分析することで通時的、共時的な分析が可能となるであろう。

主要参考文献

- 泉子・K・メイナード 1997『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の可能性—』くろしお出版
- 大森文子 2002「連句における談話とレトリック」『言語文化研究』28号 大阪大学言語文化部・言語文化研究科 229-248
- 佐伯胖 1995『子どもと教育「学ぶ」ということの意味』岩波出版
- 津田葵 2001『コミュニケーションの日米比較』大阪大学出版会
- レイブ J., E. ウェンガー, 佐伯胖訳 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書
- Austin, J.L. 1962 *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.
- Lakoff, G., and M. Johnson. 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press
- Lakoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G and M. Turner. 1989 *More than Cool Reason*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Saville-Troike. 2003 *The Ethnography of Communication: An Introduction*. Oxford: Blackwell Publishing.

Searle, J.R. 1969 *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press

参考資料：大学院入学式式辞データの一部抜粋（S5データ）

本日A大学大学院に入学されました博士前期課程2,172名、博士後期課程982名の皆さん、おめでとうございます。皆さんがA大学の活動を支える構成員として我々の仲間に入っていたことは大変うれしく、ご列席の副学長、各研究科長とともに心から歓迎致します。

大学院の前期課程においてはある程度の数の授業を受けねばなりません。後期課程ではその数が大きく減り、研究が中心となります。皆さんは大学院へ入ってきた以上、各自が自分の研究テーマを明確に持っていることが必要です。このテーマをどのような観点からどのように攻略し、修士論文、博士論文にまとめるかということについても、いろいろと考えていることと思います。今日では良い研究成果を早くあげれば、所定の期間在学しなくても学位を得ることができる時代となってきましたので、ぜひともしっかりと勉強し、また研究を行ってください。

学問の仕方については、古く本居宣長の「宇比山踏」（1798年、宣長69才の著作）に含蓄のあることが書かれています。『いやしくも学問に志す者は、始めからこれをやるのだという課題があって、また学問の方法も本人が見つかるべきである。それがかなぬ人はどこから入ってゆくのがよいか、あれこれと問い求めることになるが、よい課題、よい方法を見つけるかどうかによって、随分差が出てくるものである。しかし課題は他が押しつけるべきものではなく、本人が選ぶべきものである。学問の成果をあげるには、自分の好きなこと、自分の性に合ったことをするのがよいのであって、やり方についてもこうすればよいと教えるのは容易であるが、その通りにするのが本当に良いものかどうか疑問である。本人に任せるしかないのである。要は、忍耐強く長期間励むことが必要で、心がくじけるようではいけない。』というわけです。学問を志す若い弟子をつき放したような言葉ですが、これは、宣長の長年の学問への精進の経験から得た結論なのでしょう。A大学の大学院で学問をしようとする皆さんには、自分で道を見つけてゆく覚悟がなければなりません。

本居宣長は、今日の我々にとっても考えさせられるもう一つの重要なことを述べておられます。それは朱子学や儒学が支配的であった江戸時代において、日本古来の精神のすばらしさを発見し、その大切さを自覚し、日本人は日本人の精神性の上に学問を築くべきだと主張したのであります。真に独創的な思想や学問は、文科系・理科系にかかわらず、自分のおかれた歴史的・社会的環境の中で徹底的に考えるという研究者の主体的意

欲によってこそもたらされるということを、宣長の学問が我々に示してくれていると
いってよいでしょう。他人の学問・研究の上にちょっと接木をするようでは大きな学問
は育ちません。こういったことについても皆さんによく考えていただきたいと思います。

さて今日、社会からの大学批判は相当に厳しいものがあります。大学院学生について
は、視野が狭く、自分の研究したことの延長線上でしか物事を考えず、新しい課題に取り
組む積極性に欠けるといったことが言われています。そういったこともあってか日本
の社会は博士後期課程修了者をあまり歓迎せず、修士課程修了者を採用するという傾向
がいつまでたっても改善されません。これからの大学院修了者は、修士課程修了の人は
もちろんのこと、博士課程修了の人は特に学問研究をしっかりとしたわけですから、専
門分野の深い知識の他に、他の分野についても広い視野と適切な判断力を持っているべ
きですし、また種々の新しい課題に対してそれまでの経験を生かして積極的に取り組む
ことができねばならないでしょう。ぜひともそういった人材となって大学院を修了して
ゆけるよう努力をしていただくことを希望します。

皆さんもご存知のことと思いますが、来年度から専門職大学院制度が発足することにな
ります。法科大学院、いわゆるロースクールやビジネススクールなどと呼ばれている
ものがその典型ですが、その他に公衆衛生分野など、国家資格等の職業資格と関連した
専攻分野や、社会的に高度な専門職業能力を持つ人材育成が必要とされている専門分野
など、種々の専門分野で二年ないし三年の標準修業年限のコースで実務を徹底的に教育
するものであります。この専門職大学院構想が文部科学省で検討されたとき、現在の大
学院修士課程の修了では社会に出たときただちに実務に役立たないから新たな教育課程
を作るという提案に対し、少なくとも理工系の修士課程を修了した人は十分に実際に役
立っているという発言もあり、通常の修士課程と専門職大学院との違いはどこにあるか
を明確にすることに議論が集中しました。

専門職大学院の場合、まずその分野の実務に十分な知識と経験のある人を教官に相当
数持つこと、専門職大学院の学生は授業科目の履修の他に、実務の実習、事例研究、現
地調査などをすることにし、従来の大学院のように研究をするのではないといったこと
に修士課程との違いを出すことになりましたが、少なくとも工学系の場合は両者の区別
はあまり判然としません。ただ今後このような専門職大学院ができると、そこからは毎
年かなりの数の修了生が出ることになりますから、大学院へ入学された皆さんでずっと
研究生活を続けるのではなく、修士を終わって社会に出てゆくという人の場合は、よほど
よく自覚をもって研究的能力と実務的能力の両方についての力をつける必要がでてくる
でしょう。でなければ、専門職大学院修了の方が社会から歓迎されるということにな
りかねません。

これからの社会はますます全てのことについての公平性、透明性を重視し、競争的な環境を整備するとともに、敗者に対する救済、調和のとれた社会の発展という方向を旨とすることになるでしょうから、専門的知識とともに他の種々の分野の状況についての理解力とバランスのとれた考え方、職業倫理、社会道徳といったことを必要とします。専門職大学院では、専門分野の実務の他に、専門家としての職業倫理を教え、職業人としての使命感を持たせる教育も行うべきであると思いますが、こういったことは専門職大学院だけでなく、従来の大学院で学ぶ人達にも当然必要なことであります。したがって皆さんは自分の研究、関連分野の広い知識などの他に、職業倫理についても勉強し、社会に貢献するという使命感をもたねばなりません。A大学大学院で学ぶ皆さんは良い研究成果をあげるとともに、ここに述べましたように、これまでの大学院での教育研究とは違った新しい大学院が自分の周囲に作られようとしていることをよく知り、自分の幅を広げ、人格を確立し、将来社会の各方面におけるリーダーとして活躍できる基礎を作るべく努力していただきたく存じます。皆さんの大学院生活が実りあるものであることを期待し、お祝いの言葉と致します。